
マルコキアスの放浪記

黒助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マルコキアスの放浪記

【Nコード】

N3796K

【作者名】

黒助

【あらすじ】

天界と魔界は長い戦いの末停戦協定を結び、人間界との接触を絶った。しかし協定を結んでももなく、魔界の侯爵マルコキアスは手違いによって人間界に召喚されてしまった！

協定違反がばれない様にかっそり魔界へ帰る道を探す悪魔と、生贄にされてしまった姫の放浪記。

プロローグ（前書き）

この小説に登場する悪魔の設定はネット上で調べた記述が元になっていますが、作者個人の解釈や構造が含まれます。ご了承ください。

プロローグ

「助けて…誰か助けて！」

魔境と呼ばれるグレスヴォルグ山脈の奥深く、深い木々の間に存在する隠された邪教の神殿で一人の美しい娘が生贄に捧げられようとしていた。

その娘は黒ずんだ醜悪な祭壇に両手両足を拘束された上に魔封じの首輪がはめられていて、その周囲を黒いローブをまとった邪教徒たちが何十にも取り囲んでいる。

「助けを呼んでも無駄だ、サークレアの姫巫女よ。お前はここで我らが奉ずる神に仕える魔を呼び出すための贄となる。

お前の持つ純潔と高貴な血、それに膨大な魔力は強力な悪魔を我らの元に呼び出してくれるだろう。」

邪教徒たちが邪神に捧げるおぞましい呪文が広間に響き渡る。哀れな姫巫女の前に立つ邪教の司祭は蛇が這うような彫刻が施された短剣を手中で弄びながら、呪文の完成を心待ちにしている。

不意に神殿の門の方角が騒がしくなり、門を破らんとする丸太をたたきつける音、矢に倒れる兵士達の悲鳴が広間に届いた。

「何事だ！」

「サークレア聖騎士団の襲撃です！」

ところどころに傷を負い、狼狽した様子の兵士が広間に飛び込ん

できて司祭に叫んだ。

「この場所まで無理やり進軍してきたようです。本来の数より多少目減りしているようですが、とても持ちません！早く避難を！」

しかし司祭はもちろん広間にたたずむどの邪教徒も身じろぎひとつせず、呪文の中断もしなかった。

「はは、召喚までもては何の問題もない。そうすれば我らが呼び出した厄災の魔獣が、奴ら聖騎士団を引き裂き、忌々しい神聖王国サークレアの民も貴族も王族も、まとめて皆殺しにしてくれよう！」

「いやよ！そんなことさせない！ 私はここよ！」

呪文の狭間に司祭の哄笑が響く。しかし姫巫女の助けを呼ぶ声は姫を求める聖騎士の耳に確かに届いた。剣戟の音は怒涛の勢いで儀式の広間に迫る。

そして広間の扉が蹴破られ、聖騎士達が弓を構えるのと、召喚の呪文が完成したのはほぼ同時だった。

「頭の腐った邪教徒共！我らの姫を返せ！」

怒りに燃えた団長の怒号に合わせ、聖騎士たちが弓を引き絞る。しかし、そこに横たわった姫の姿に彼らは一瞬躊躇してしまった。

その一瞬が命取りになった。

「ソロモン72柱の序列35位、凍てつく炎の狼よ！生贄の体、心の全てを食らい、我が呼びかけに応えよ！」

司祭の振り下ろした短剣は巫女姫の心臓を深々と貫き、それと同

時にいくつもの矢が司祭へと放たれた。

「姫！」

「姫様！」

すぐさま聖騎士たちは姫巫女に駆け寄ったが、そこには既に姫の姿は無くなっていた。

・・・生贄に捧げられたものは、肉のひとかけら、血の一滴にいたるまで呼び出したものに食われ、取り込まれる。そしてそれは召喚の成立の証でもある。

「なんとということだ・・・皆、離れる！」

祭壇の下に書き込まれた召喚の魔方陣が淡く光り、その場に魔を呼び出した。

プロローグ（後書き）

完結できるようにがんばりたいと思います。よければお付き合ってください。

第一話 召喚（前書き）

この小説における天界・魔界・人間界の定義について

天界：いわゆるキリスト教やユダヤ教の神が治める世界。この小説ではこの神を奉じる宗教は『十字教』として一つに纏めています。

魔界：一神教の神に貶められた他の多くの神や墮天使の治める世界。彼らのことを総称して悪魔と呼びます。

人間界：無数に存在する人の住む世界の総称。この小説では人間界は一つだけのように思えますが、本当はいくつもある『世界』の一つだと考えてください。（地球も並行世界に存在します）

第一話 召喚

終わらない。

終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない終わらない
い……だあっ

「いつ無くなるんだこの書類の山はっ！」

思わず頭を抱えて天を仰ぐ俺。頭を急に上げたことよって生じた風圧がそこらの書類を舞い上げる。そしてそうしている間にも増える書類。

まじ無理。ほんと勘弁。俺が処理するスピードより運び込まれてくる方が早いつてどういうことだよ。

現在、俺を含む魔界の地位ある悪魔達は大変忙しい。

今まで天界とのいつ終わるやも知れない大戦を繰り返していた俺達だが、このたび停戦協定が結ばれたのである。

無論、それでも天界との仲は最悪と言ってよく、交流どころかテロや反・反戦運動（戦争やれという運動）を抑えるのがせいっぱいだが、天界・魔界共に現在軍縮を行っていてそこそこ順調だ。

簡単に言うと停戦協定の内容は次の通りだ。

- ・ 双方はお互いの領土、領民に攻撃を仕掛けない
- ・ 双方人間界に不要な干渉をしない（例：夢のお告げなど）
- ・ 悪魔は人間の召喚に応じない
- ・ 神や天使は人間の祈りに報いない

まあ要するに天界・魔界・人間界で干渉せずによつてことだ。

魔界には不満を言う大悪魔も大勢居るが、俺はいいかなと思ってる。今まで戦争、戦争、また戦争だったし、停戦協定がいつまでも続かないのがありえないって分かるからこそ、つかの間の休息を味わってみたいんだ。

まあ、その結果が冒頭の書類の山な訳だが。

というかこれ明らかに俺の分以外のも混ぜてるだろ…俺の軍の再編成はとっくに終わったし、切った連中への辞令も出したぞ…

「おいその。これはどこの部隊の書類だ？」

今さっき俺の机に書類の山をひとつ追加した文官に聞いただけしてみる。

「アンドラス様のですが」

「返して来い」

あとでぶっ殺す。

「いえあの、すいません、もって帰ってきたら殺すって言われていまして…」

部下を何だと思ってやがるんだあの野郎。

「どうすっかな…」

ともかく俺だけでこれを処理するのは無理だ。よく見たらアンドラスのだけじゃなくてベリスとかヴォラクのも混ぜてるし。気晴らしもかねて書類仕事のできる知り合いに応援を頼みに行こう。

俺は人間の姿から本来の姿である翼ある狼になり、書類の一部を入れたトランクケースをくわえて外へ出た。
まずはストラスのところに行くかな。

「ストラスーちよつと頼みたいことが…」

執務室の扉を開けたら部屋が紙で埋まっていた。

扉を開けたら廊下まで書類がズザーツと流れてきた。

・・・シャレにならねえ

俺のところはむしろ手加減されていたのかもしれないと思ってしまっただけだ。やはりというか博識で有名なストラスの所にもしわ寄せがいったらしい。

まあ実戦武官である俺のところにも来てるんだから当たり前だよなーはは。

「ス、ストラス。生きてるか？おい」

「マ・・・マルコキアスカ・・・俺はもうだめかも知れん・・・形見にこの宝石をうけとつて」

「衛生兵ー！衛生兵ー！」

無理だ。ストラスには頼めねえ。俺には死人に鞭打つような鬼畜な真似はできない。まあ、とりあえず癒しの魔法が使えるブエルを呼んでおいたから大丈夫だろう。

あんまり迷惑かけたくないけどゴモリー先輩の所にも行ってみようかな・・・あ、やっぱ止めとこう。あの人はお人よしの上に世話焼きだから俺が行くまでも無く書類を押し付けられているに決まってる。

ゴモリー先輩は俺の元上司だ。昔からなにかと世話を焼いてくれ

て、俺は今でも尊敬している。ついでに言うともものすごい美人だ。先輩に会うたびに俺って幸せ者だよなって思えるんだぜ。

他にも色々な知り合いを当たってみたが結局全部空振りだった。俺や先輩に書類を押し付けた奴は後で調べ上げて家を爆撃してやるうと思う。

「泣いて謝っても許さんぞ・・・げへ・・・」

爆撃予定の連中の泣きっ面を想像しながら半分空ろになった顔で俺は残った書類を片付けていく。とりあえず後はサインするだけという書類を重点的に減らしていこう。現実の仕事量は変わらなくても視覚的に書類が早く減っていくから楽なんだ。もうほとんど頭なんか使っていないぜ・・・

片っ端から書類にサインしている俺は、他とは異なる内容の書類にサインをしてしまったことに直ぐには気がつかなかった。ちょうどサインし終わった時、斜め読みた内容が目に入ってくる。

・・・召喚・・・生贄・・・対価に・・・力を貸し・・・

「あれ？」

これって召喚要請の書類じゃね？

たしか停戦協定が結ばれた時から人事部に全部回されて自動的に拒否されるようになったはずじゃ・・・俺の目がおかしくなったのかもしれないのでその書類をよく読んでみる。

召喚要請 創生暦137億3247万8千2百7十五年 10月

8日 *持ち出し禁止

宛先：ソロモン72柱序列35位 マルコキアス様

本文：～前略（邪神に対する美辞麗句とか季節の挨拶）

～中略（姫巫女がどう生贄として優れていてそれを手に入るためにどんな苦勞をしたかとか）

神聖王国サークレアの姫巫女を対価として差し出しますの
でどうか力をお貸しく下さい（要約）

邪神を支援す

る会：グレスヴォルグ山脈支部より

.....

やっちまったorz

いやこれ俺のせいかな？俺のせいなのか？紛らわしいにもほどがある
だろ！人事の連中は何やってんだよ！

しかし一度承諾してしまった契約はたとえ魔王でも覆せない。俺
はそのままなすすべなく人間界に召喚されてしまった。

でもこれで書類地獄から逃れられるなーとちよっぴり思ったのは
秘密だ。

もしくは現実逃避だ。ハハハ・・・(泣)

第一話 召喚（後書き）

マルコキアス：ソロモン75柱序列35位魔界の侯爵。

本来の姿は翼を持つ狼で、人の姿を取っているときは強力な剣士であり、真面目で誠実な態度で召喚者に接するという。

ただしそれに対して不誠実な態度をとったり、嘘をついてそれがマルコキアスにばれれば八つ裂きにされる。

元はゴモリーの騎獣兼副官だったが、ミカエル軍に多大な被害を与えた戦功で昇進した。

第二話 逃走

召喚されたらそこは敵の真ん中でした。

いつもなら召喚される前に元の狼の姿に戻って、スモークたいて「我を呼び出したのは汝か？」とかかっこつけて登場するんだけどね。召喚者に侮られないように。(魔術師ってのはたまりにやたら横柄な奴がいるから困る)

でもついさつきまでデスマーチのような書類地獄を味わっていた俺にそんなことを気にかける余裕も時間も無いから。普通にスーツ姿だよ。

邪教の神官達の死体が転がる血なまぐさい広間で、悲壮感漂う、だが闘志は衰えてませんって感じの騎士団が巫女姫の消えたおぞましい魔方阵を凝視する。

そこに現れるサインペンを持ったままの俺。

シユールすぎる・・・

騎士団の人らなんか(。(。))って顔して固まってるじゃねえか。こっちみんな。

.....

.....

.....

お、俺はどうすればいいんだ・・・なぜか召喚者既に死んでるし。お前が呼んだんだからせめて指示のひとつでも残してから逝けよ。何したらいいのかさっぱりじゃねーか。

そんなことを考えてたらようやく騎士団のリーダーが金縛りから復活したらしく、なにやら目配せを始めた。

お、ついにこの気まずい現状を打開してくれるのか。

「あいつを捕らえろ！抵抗すれば殺してもかまわん！」

ですよねー！

捕まっつて悪魔であることがばれたらほぼ間違いなく殺されるので俺は逃げるぜ。

いやまあ、この程度の規模の騎士団なら楽勝でミナゴロシにできますけどね？グラシヤラボラスとかと違って俺は別に快樂殺人狂じゃないし、それに俺からしたら誤召喚みたいなもんだからなあ。俺のつまらないミスのせいで死ぬとか超不憫、かつなんか俺の後味が悪いし。

俺は矢を掴み取ったりサインペンで剣の軌道を逸らしたりしながら迫り来る騎士たちの間をぬって広間から脱出し、神殿の出口へ続いていると思われる廊下を全力で走る。兵士の死体や破られた扉とか騎士たちが突破した跡が残ってたので案外たやすく外に出ることが出来た。そのまま深く茂った木々の中に逃げ込む。

はっはー！森の中で元が狼の俺に甲冑着込んだ騎士たちが追いつけるはずねーだろ！

俺はそのまま時々現れる魔物の上を飛び越え、あるいは投げ捨て

ながら山脈を走りぬけ、おそらく国境線か何かだと思われる高い壁を越えた。

「うん。ここまですればとりあえず大丈夫だろう。人の足なら3日はかかる距離離れたし」

それにしてもあれだ・・・本当に人間界に落ちたんだなあ・・・

辺りを見回すと爽やかな風が駆け抜ける草原。その向こうには賑やかそうな商店がいくつもある大きめの町がある。遠目には羊飼いに連れられてきた羊達がたくさん散らばっているのが見える。

・・・なんと平和な光景だ

俺は昔から人間界に行きたいと思ったことはないし、そのために人間の欲しがる能力を獲得しようとしたことも無いから、必然的に呼ばれることも少なかった。

俺が持つのは、磨いてきたのは破壊の為の力。戦争で使えるものだけだ。

こんなに平和な光景を見る機会はひよっとしたらこれ切りかもしれない。そう考えると少しだけ得をしたような、前向きな気分になった。

気持ちのいい日が射す原っぱに寝そべりながらこれからのことを考えてみる。

「どう考えてもまずいよなあ・・・」

天界と停戦協定を結んでいくらしもない内にそれを破ってしまっ

た。天界にバレたらいくら事故だの手違いだの言っても今まで殺しあってきた相手のことなど信じようとしないだろうし、魔界のほかの悪魔達にバレても戦争推進派の連中が『私は協定を守るつもりでしたが、あの人が先走ってしまったのではしかたないですなあ』とか言いながら責任を全て俺に押し付けて戦争を再開させるに違いない。

「やっぱりバレない様にこっそり帰る道を探すしかないか・・・」

召喚された悪魔は通常、召喚者の望みを叶えれば帰還出来る。でも俺の場合既に召喚者が死んでるのでそれはできない。

他の方法としては、人間界で生まれた強力な悪魔が魔界に行くための通路があるが、よくこの通路をつかって魔界の悪魔が人間界に出入りしていたので、停戦協定にもなって立ち入り禁止になっている。

あれ、八方ふさがりじゃねえかこれ？

・・・

だめだ、普段から正規のルートしか使うつもりが無い俺には他に何も思いつかねえorz

・・・しょうがない。ゴモリー先輩に連絡してみよう。

俺は懐から携帯を取り出してゴモリー先輩に電話をした。

『あらマーくんおひさしぶりー。どうかしたのー？』

ぐっこの無邪気な声を聞くとこれから言うことに対してすごい罪悪感を感じるっ！

「あの、すみません先輩。軍関係の書類になぜか召喚要請の書類が混じってて、うっかり召喚されちゃったんです。どうしたらいいでしょうか？」

電話の奥から今の俺の言葉を理解しようとしている気配。沈黙が痛いぜ。

『・・・ん、状況を詳しく説明してくれる？』

そういうわけで俺はできるだけ詳しく召喚されてから今までの事を話した。

『えっとねーそれはやっぱり天界にも魔界のみんなにもばれちゃったらマズいわー。私もふさがれてない通路とか、人間界から魔界へ帰れる他の方法をみんなからそれとなく聞いとくから、しばらくはおとなしく待ってて？マー君が元の姿で暴れまわったら一発でばれると思うからー』

「そんなことしませんよ・・・とりあえず人の姿で生活してたらばれませんよね？」

『うんー。今は天界も魔界も人間界に対して基本不干涉だからー。多少人間ができる範囲を超えたことやっても大丈夫だとは思っよー。狼の姿になっても飛び回ったり爆撃したりしなれば大丈夫ー』

「しませんて・・・わかりました。俺もこっちで帰れる方法を探し

てみます。迷惑かけた埋め合わせは帰ってからちゃんとしめますから」

『ん。楽しみにしてるよ。バイバーイ』

ゴモリー先輩はまじでいい人だな。

よし、先輩にできるだけ迷惑かけないためにもがんばろう。

そう決意を新たにして立ち上がった俺の目の前に美少女が浮いていた。

………？

え、なに、幽霊？俺になんか用？

第二話 逃走（後書き）

ゴモリー：ソロモン72柱序列56位の魔界の公爵。

公爵夫人の冠を携えた美しい婦人。数少ない女性悪魔の一人でラ
クダに乗って現れるといわれている。穏やかな性格で争いを嫌う。
召喚者に老若問わず、女性の愛をもたらす力も持つ。

第三話 生贄の姫

「あの、俺に何か用でも？」

ビクツと震えてやや遠ざかる美少女幽霊。おとなしそうな顔立ちで、年齢は16歳くらいかな？あからさまに怯えて涙目になっている。

お、俺がいったい何をしたっていうんだ。へこむ・・・

『あの、あなた悪魔なんですよね』

そうだが、何で知ってるんだらう。そこらの幽霊に見破られるほど落ちちやいないぞ俺は。

『私、あなたの生贄として殺されたんですが何でここにいるのですよ』

・・・あ、忘れてた

生贄に殺されたものは普通、体も魂も、何もかも悪魔に食い尽くされて消え去ってしまう。転生もしないし幽霊にもならない。

まれに悪魔がその生贄の人間を気に入った場合は、死んだ体に魂を戻して傍仕えや奴隷にすることもある。そうなると所有者である悪魔から逃げることは悪魔自身が許さない限り永久にできない。

だが今回俺は手違いで召喚されてしまった事に気がいつて、生贄の存在なんかそれはもうきれいさっぱり忘れていたのだった。

「あーどうしようかな・・・」
『私はどうなったのか、説明して欲しいのですが』

美少女幽霊が俺をちよつと睨み付けてくる。涙目でそんなことさ
れてもかわいいただけぞ。

「うんとね、君はもう死んでる。オーケー？」

『わかり・・・ます。だって心臓刺されたし・・・』

「そう。その事実は覆せない。でも俺は手違いで召喚されたんだよ
ね」

『それは・・・つまりどういうことですか？』

うんごめん。手違いの召喚で悪魔のものにされるとか最悪だよな。

「俺は呼びかけに応えるつもりは無かったんだ。というか今は魔界
の事情で召喚できないようになってるはずなんだよ。それが手違い
で召喚されちゃったみたいにな・・・」

『・・・ではあなたが召喚されなかったら私は生きていたんですか
？』

「いやそれはないけどね」

俺が召喚拒否をしていたとしてもそれは儀式が失敗に終わり、生
贄の魂は普通に人が死んだときと同じように天に昇り、また転生す
る時を待つことになるだけだ。生き返ったりしない。

『・・・じゃああなたは私をどうするつもりなんでしょうが』

ものすごくきつい視線で俺を睨み付けてくる美少女幽霊。まあ普

通食われるか奴隷かだから、警戒するのも分かるけどね。

「まあ誤召喚だし。召喚者も死んじゃってるし、奴隷にする気も無
いから。このまま成仏したら？」

彼女は拍子抜けしたように首を傾げた。

『・・・私を食べないの？』

「だって俺召喚者の望みなんて何も叶えてないし。仕事しないで報
酬だけ貰うなんてフェアじゃないだろ」

彼女は報酬扱いたのに腹が立つたらしく、ムスツとした顔でそ
っぽを向いた。そのまま沈黙が続く。

彼女がポツリとつぶやいた。

『私はもう私　　ヒルデリア・ヴォン・サークレアとしての記憶
を持って生きることにはできないのですか？』

「俺が君の死体に君の魂を入れて、生きていて欲しいと思えば可能
だよ。ただしその場合、体も魂も俺に囚われたままだから、俺に逆
らえないし俺から離れることはできないけど。」

俺は知り合いみ^{フーネ}たいにネクロマンスに精通してる訳じゃないから
それ以外方法を知らない」

彼女は地面に視線を落として何事かじっと考えているようだ。空
色の瞳がうつすらと涙に揺れている。

俺は急ぐことも無いので彼女の結論を座って待った。

しばらくして不意に彼女が顔を上げた。

『あの、あなたは私を奴隷にする気はないって言いましたよね』
「言ったね」

『できるだけ早く魔界に帰るつもりなのですよね』

「電話聞いてたのか？まあそうだよ」

『じゃああなたが魔界に帰るまであなたの傍にいて、その後で天に昇る。という風にしていいでしょうか？』

なんだそれ。俺という意味はあるのか？途中で気が変わってパクリといくかもしれないか思わないんだろうか。

「何でそんな面倒なまねをするんだ？」

『あなたが伝承にあるような残虐な悪魔ではないことはなんとなく分かりましたけど、私の国に害をなさないという保証はありません。まあ仮にそうなったとして止められないでしょうけど・・・滅ぶにせよ栄えるにせよ、国の行く末を、私が生きるはずだった分の何分の一でも知ってから逝きたいのです』

彼女の目はさつきまでとは違い、生きる希望を持ったものだった。その誇り高い生気に満ちた目はとても幽霊とは思えない。

なるほどね。そういえば姫君なんだっけか。

「理由は分かっただけど、俺と来るならいくつか『従って』貰わないといけないことがあるんだ。所有者の権利において命じるから拒否

はできないよ」

『・・・何ですか？』

「そんなに構えないで欲しいね。俺達二人にとってお互いのためになる『命令』さ」

うつかりやられたら食い殺しちゃうかもしれないからね。

「一つ目は俺の正体をばらす様なあらゆる行為の禁止。二つ目は君の素性をばらす様なあらゆる行為の禁止。君は本当は死んでるんだからね。ばれたら不味い。三つ目はお互いに嘘はつかないこと。あ、黙秘は認めるよ」

彼女はなんだか珍獣を見るかのような目で俺を見た。なんだよ。俺は必要なことしか言っていないぞ。

『悪魔は嘘しか吐かないものだどと神官様に聞いたことがあるのですがど・・・お互い嘘はつかないって、どうしてあなたもそうする必要があるのですか？』

あ、やっぱり神の教えてそんな感じに書かれてるんだな。悪魔にもいい奴はいるんだぞ。ゴモリー先輩とか。

「まあ悪魔に嘘吐きが多いのは事実だけどね。だけど俺は違うと思うか・・・嘘をつかれるのがはらわたが煮えくり返るほど嫌いなんだ。ついた奴をほぼ確実に殺すくらい。だから俺も嘘はつかないようにしてる」

俺のこれはただ嫌いというよりも悪魔としての特性に近いものがあるね。嘘だつて分かった瞬間に理性飛ぶから。

『わかりました。約束します・・・で、どうやったら私は体に戻れるのですか。それ以前に私の体はどこに消えたのでしょうか？あの祭壇には無かったと思いますよ』

「召喚の契約書にサインしたら自動的に俺の所に送られるようになるから、たぶん魔界の俺の執務室じゃないかな。」

あ、そんな絶望的な顔しなくても呼び出せるから！悪魔に生贄として捧げられたものは存在ごとその悪魔の所有物になるから、欲しい時に呼び出せるんだよ」

その後俺は魔界から遺体を呼び出して彼女を復活させた。いやまあ『生きる』って命じるだけなんだけどね。

命じていくらも経たないうちに彼女の衣類にしみこんだ血が傷口に戻って行き、醜く抉れていた刺し傷は逆再生のビデオを見るように消えていった。心臓が動き出し、息を吹き返す。

先ほどまで俺の隣にいた美少女幽霊は消えて、生身の肉体を持った彼女が起き上がった。

生贄である彼女は血の一滴にいたるまで俺の命令には逆らえないため、俺に支配されて望まれている限り世界の法則を無視して生き返ることができる。」

その後彼女は体の動きを確かめるように軽い体操を始めた。

「さっきまで死体だったなんて思えないほど動けるんですね。生きてた頃と何も変わらないです」

「俺がそうなるように望んだからね。ちなみに君は俺が望む限り、何回死んでも復活できるし怪我も治せるよ。」

もし途中で俺との旅が嫌になったら言ってくれ。そしたら俺は君の所有権を破棄するから。

そうすれば君は天に昇れる」

「わかりました。これからしばらくお世話になります。さつきも言いましたけど私は神聖王国サークレアの第二姫、ヒルデリア・ヴォン・サークレアです。ヒルダと呼んでください」

「ご丁寧にも。俺の名前はソロモン72柱序列35位魔界の侯爵マルコキアスだ。呼び名は・・・マキアスとでも呼んでくれ」

俺達は立ち上がって軽く握手をした。礼儀は人付き合いの中でも大切なものの一つだよな。

「ここにおいても仕方ないし、とりあえず町に行こうか。幸い向こうの方に見えてるし」

「そうですね。服に穴開いたままだし買い換えたいです。騎士団があなたの顔と私の死を確認している以上、顔を隠す物も必要です」

そういつことで、俺達は町に向かうことにした。

第三話 生贄の姫（後書き）

誤字とかありましたら報告してください。

第四話 武具屋にて

あの後しばらくして俺とヒルダは無事町に到着した。

だがヒルダは生贄に捧げられたとき着ていた穴あき衣装、俺はス
ーツだ。怪しさ満点である。

そういう訳なので今は町に入らずに、町の入り口の前に陣どつて
る露天商で服を物色してる。何でももうすぐこの町で小規模な闘技
大会がもよおされるらしく、それを見に来る客目当てでこの町に来
たものの、商店街の場所取りに失敗してしかたなくここで商売をし
ているらしい。

予算はヒルダが身につけていた宝石を換金して得た金貨2枚銀貨
12枚銅貨32枚。ちなみに金貨が10000セル、銀貨1000セ
ル、銅貨1セルだ。適正な価格なのかどうかは俺もヒルダも市井に
疎いので良く分からなかった。

だが少なくともそれを買取った商人がなけなしの財産をはたい
たことと、これが二人分の服を買うのに十分な額であることは分か
ったのでよしとする。

「マキアスはどうなのがいいと思いますか？」

「『通路』を探す以上すごい長旅になるだろうからな。荷物は少な
いほうがいいし、動きやすいのは当然として、袖が取り外せるやつ
とか、簡単に羽織れるのがいいかな」

「あ、なるほど。そうですね」

そしてなにやら嬉しそうな顔で服を物色し始めるヒルダ。ゴモリ
―先輩もそうだったけど女の子って買い物好きだよなあ特に服とか

結局2時間ほどかけて買い物は終了した。

ヒルダは動きやすそうなゆったりとした灰色の長袖とズボン。それに砂漠越えや雪の時役立つ、砂除けの皮布が首周りをぐるりと覆うようになっている帽子とスカーフ。

そのいでたちは姫君というよりも砂漠に住む盗賊団の見習い少年のようだ。スカーフを口に巻けば顔はほとんど分からなくなる。

俺は綿のシャツと、袖が取り外せるようになった皮製の黒の上下。自然に顔を隠せるものが見つからなかったためそれについては保留。まあまだ大丈夫だろうし。あとスーツは邪魔だから売った。銀貨3枚になった。

まともな格好になった俺達は特に見咎められずに町に入り、とりあえず近くの食堂つき宿で飯を食べることにした。

適当におすすみを二人分注文して食べ始める。

「私はずっと王宮で暮らしていたけど、時々お忍びで城下町に行ったこともあるんです。でも色々行っただけにはいけない所とか制限が多かったから、こうやって護衛も無く町なかにいるのは新鮮です」

ヒルダはそう言ってミートスパゲッティを口に運びながらも窓の外に視線を走らせている。ほっぺたが膨らんでリスのようだ。

今までにない体験に軽く興奮しているらしい。そういえば限られた予算の範囲内で服を買うというのも初めての体験だったのかもしれない。選んだ服も姫様っぽくなかったし外に憧れてたんだろな。

「ふーん。俺ときたのはそういう目的もあったのか？」

「なっ、あくまで視察の一環です！市民の生活を知るはその国の

豊かさを知ることに関がりますから！」

なんかムキになって怒られた。顔が真っ赤になってるぞ。

「そんなに否定すること無いだろうが・・・今は姫じゃなくてただの旅人なんだし。楽しんだって罰はあたらねーよ」

「悪魔と一緒に旅をするのに罰が当たらないって言うのもある意味問題のような気もするのですが・・・」

ひでえな。天界の神にばれたら俺には本当に罰が当たるんだぞ。

「それはそうと旅を始める前に一つ問題がある」

「何ですか」

「金が無い。正確に言えばこのままではたぶん半年以内に資金が底をつく」

ヒルダがなにやら呆れたような、げげんな顔をした。まあ今まで金の心配なんかした事無いだろうから、ピンとこないのかもしれない。

「悪魔って召喚者に富を授けたりして墮落させるって聞いたことがあるんですが、自分には出せないのですか？」

「あーそういう事出来る奴は多いな。貴金属の鉱脈を教えてくださいマンモる奴とか、卑金属を黄金に変える方法を教えてくださいヘリスる奴とか、隠された財宝のありかを教えてくれる奴バルバトスとかかな。でも俺は金銀財宝にそんなに興味無いからそういうスキル身につけてないんだ」

ちなみに悪魔が使える最もピュラーな能力は、男女の仲をどうにかするものだ。これだけはいつの時代、どんな種類の人間にも望

まれているものらしい。

まあ俺は使えないけどね。それについての権威コモリが身近にいるし・

「じゃあ他に何か役に立つ魔法とかは？」

「魔法・・・は種類しか使えない。しかも魔法と言っていいのが良く分からん代物だし、少なくとも金にはならんよ」

ヒルダはスパゲッティを食べる手を止めて、どういうことですかと言いたげな微妙な表情で俺を見てきた。説明し辛いんだよな。

「なんていうか、先輩に言わせると魔法と言うより戦略兵器らしい」「・・・よくわからないけど、ろくでもない魔法だって事は分かりました」

こうやって考えてみると本当に俺って戦争バカだな。金になりそうな役立つスキルを何ももって無いわ。

「・・・で、結局マキアスは何ができるのですか」

「・・・剣は得意だ。あと兵法とか用兵とか」

・・・

やめて！その『使えねえ』って目で見るのはやめて！地味につらい！

「じゃあやれるのは傭兵ぐらいしか無いんじゃないでしょうか。私も精霊魔法ならいくつか使えるので。仕官すると自由に動けなくなるから軍隊は駄目でしょう」

「うん・・そだね。後で残った金で剣とか防具揃えてからギルドに登録しに行こうか」

そういうわけで刀剣・防具専門店に来たよ！

いろんな剣や鎧があつて多少テンション上がり気味。人型で戦つてここ最近あんまり無かつたから鎧合わせるの久しぶりなんだよね。

「俺は普通の人間と比べて力も速度もあるから全身鎧フルプレートでいいかな。ちよつど良く顔が隠せるし、重さでちよつとは遅くなつたほうが人間ぽくなるだろう」

「そうかもしませんね」

(全身鎧の男の人が軽装の兵と変わらないようなスピードで走つたら変のような気がしますけど)

俺はいくつか試着した結果、一番間接が動きやすくて重い黒鉄色の鎧を買つた。重いせいで長いこと買い手がつかなかつたのか店主はかなり安く売ってくれた。

剣もいくつも手に取つて振つてみたがどうにもしっくり来るものが無い。昔俺が使つていた物よりもはるかに細くて軽いのだ。こんなものを俺が本気で叩きつけたら一撃で折れてしまふだろう。

どうにも困つて店内をぐるりと見回してみると、資材などを置いてある目立たない一角に一振りの巨大な大剣クレイモアが放置されているのが見つかった。

俺はそれを手にとって良く観察する。

「兄ちゃん、実はそれさる高名な剣士殿が注文したつて言う大剣で

ね。なんでも二十メートル以上もある中型竜種を殺すために作ったらしいんだ。

だが傑作な事にできた大剣をその剣士がまともに振れなかったらしくてな！それで使われないままこんな所で埃被ってるんだわ。馬鹿だよな〜」

暇そうな店主が解説をくれた。なるほどこれは竜種の硬い鱗に叩きつけても折れるような厚みをしていない。とにかく頑丈さを追求し、切ることは二次。圧倒的な重量で潰す様に切断することを目的としたものだ。

大きすぎて店内で振るわけにはいかないが、その重さと頑丈さだけでこれを選ぶ条件はそろっていた。そのまま店主のところまで持つて行く。

するとおっちゃんは話し聞いてたのかよと言わんばかりに止めてきた。

「ちょっと兄ちゃん！あんたがどれだけ力自慢か知らないがそんな細っこい体でそれが扱えるわきゃねーだろうが！悪いこと言わねえからやめとけ。女の前で見栄張りたい気持ちは分かるけどよ」

いや俺が昔使ってた剣よりかは軽いよ。

何度もこれでいい、扱えると言ったが店のおっちゃんは売ってくれなかった。なんでも俺の無茶を見過ごして、後で死なれたら目覚めが悪いらしい。

どうしたもんかな、と思っっていると店の壁に露天のおっちゃんが話していた剣術大会の知らせが張ってあるのを見つけた。

・・・これは使えるかもしれない。

「なあおっちゃん。たしか4日後にこの町でコーゼス闘技大会って言う、傭兵でも騎士でもパン屋の親父でも腕に覚えがあったら誰でも参加できる大会があったよな」

「あ？そうだな。王都や軍事至上主義のザムレット帝国で行われるようなもんとは比べ物になんねえほど小規模だけどな。

もっともここは悪名高きグレスヴォルグ山脈に一番近い町だ。他に比べりゃ傭兵の質もいいし、実力は傭兵でいうところのAランクに近いような騎士だって参加するって噂だぜ」

「だったら俺がこの剣を使ってその大会に優勝したら、俺がこれを扱えるって認めて売ってくれるか？大会で殺しは禁止だからおっちゃんも安心だろ」

店のおっちゃんは開いた口がふさがらないといった感じで、ものすごく呆れた顔をしたが、少しは痛い目を見たほうがいいと思ったのか、なんだかかわいそうなものを見る目になりながらも了承してくれた。

なんだか釈然としないが、4日後が楽しみだ。

第五話 コーゼス闘技大会（前編）

俺たちは店を出た後、ギルド登録は大会終わるまで保留ということにして近くに宿を取り、4日間そこを拠点に色々旅の用意を整えてすごした。

俺は闘技大会が終わるまであの大剣をおっちゃんから借りるということになったので、代金は既に払っておいた。おっちゃんはいいて言ってくれたんだけど、やっぱりこういうことはきっちりさせとかないとダメだと思っただ。もし大会で負けたら剣は返すって証書も書いた。

あとヒルダも短剣とナイフを何本か、それに三段ロッドみたいな無骨な鉄の杖を買ったから俺たちの金はほとんど無くなってしまった。そのためにも俺は大会で優勝しなければならぬ。

ちなみに優勝商品は駿馬と評判の馬一頭、それに30000セラだ。庶民からすれば目もくらむような大金と言っても過言じゃない。大会はトーナメント式で8日にわたって行われ、勝ち抜いていけば一日に一回ずつ戦うことになる。他の選手の試合を見るのは自由のようだ。戦略立てるのも実力のうちって事だろう。

「それで、マキアスは何か勝算でもあるんですか？お店ではすごく自信満々で、勝つのが当たり前みたいに言っていましたけど」

今は大会前の待機の間だ。俺は番号を呼ばれるまで待ってる。ヒルダは付き添いで、試合はちゃんと見ていてくれるみたいだ。

そのせいか周りの選手の視線が痛い。時々「いいご身分の野郎だ・
・」とか「ぶち殺したい」とか「死ねばいいのに」とか「リア充
爆発しろ!」とか聞こえてくる。幻聴だと思いたい。

「いや、勝算って言うか、普通に戦って勝って優勝するだけなんだ
がな」

「じ、自信満々ですね」

そう言うともはや周りの視線は嫉妬というより純粹な殺意に変わ
った。聞こえてくるの幻聴も「なめやがって・・」とか「ぶち殺
す」とか「死なす」とか「爆 殺!」に変わってたりした。うるさ
いな。

ヒルダもちよつと呆れたような苦笑いになって、「油断したちゃ
ダメですよ」と、言い残して観客席に行った。

そんなに見ごたえあるもんにならないと思うがね。

2時間ぐらいたってようやく呼ばれたので行ってみる。最初の相
手はとりあえず鍛えたって感じの筋肉たるまだった。筋肉を強調し
たいのか上半身に鎧どころか服すら着てない。全身鎧の俺とはある
意味対照的だ。力に自信があるってところは同じだが。

相手の得物は刃を潰した大きい鉈のようなものだ。おそらくは傭
兵といった類の者ではなく、本職は木こりか何かなのだろう。

「では128番(俺)と54番、はじめっ!」

木こり(暫定)は気合の入った雄叫びを上げながら鉈を振り上げ
て俺に向かって突っ込んでくる。技巧も何も無いただの力押し。避

けるのは容易い。

が、俺はあえてそれを更なる力押しで返すことにした。こんな奴に剣士の戦い方をする必要はどこにも無い。

俺は体をさらすように剣を持った右手を横に引いた。避けるのでも鈍を受けるでもない俺の構えに、観客の何人かがどよめく。

そして木こり（暫定）が俺の間合いに入った瞬間、奴は空を飛んだ。

そしてそのまま観客席に落ちる。どうやらろっ骨が軒並み折れたらしく、苦悶の声を上げている。起き上がってくる気配は無い。

「しよ、勝者128番！」

審判は宣言しながらも、信じられないものを見たと言わんばかりに目を見開いて俺と筋肉たるまを交互に見つめた。

俺は別に特別なことをしたわけではない。ただ単に奴が俺の間合いに入った瞬間に、剣の腹で横薙ぎに殴りつけただけだ。まあ、あそこまで飛んでいったのは予想外だったが。

これからはもうちょっと加減しよう。

宿に帰ったらヒルダがすごく興奮してはしゃいでた。

「すごいですね！私、人が飛んでいくのなんかはじめて見ました！
お店のおじさんも見てたんですけど口あけて固まってましたよ！」
「あー、やっぱりやりすぎたかな」

「かも知れませんがすごかったです！」

「・・・うんありがと」

「私も出ればよかったかなあ・・・」

あれを見て恐怖を感じないとは、ヒルダは思ったよりも豪胆な娘だな。

俺たちはその日俺の初勝利を祝ってちょっと豪華な夕食を食べた。

闘技大会が始まってから6日が過ぎた。俺は当然勝ち残っている。
毎日参加者が一回戦うから生き残りが毎日半分になる仕組みで、
今残っているのは俺も含めて8人だ。ここまできると町中の観客が
俺の戦いを見るわけで、今やちょっとした町の有名人状態になっ
てしまった。

おまけにヒルダの話によると、俺が無名の剣士なのをいいことに、
町の観客や司会者が勝手に二つ名をつけているらしい。

いわく「強打者」だの「スラッガー巨人族」だの「ジャイアント黒鉄の魔人」だの「ワンシ一撃
ヨット必殺」だの・・・
どこの厨二病患者だよ。

まあこの恥ずかしい二つ名からも分かるように、俺は今までの試合は全て最初と同じ方法で勝った。

何でかというと、剣技そのものの実力を隠しておきたいという理

由もあるが、相手にとってこれが一番安全な方法だからだ。

この大剣は別に刃引きしてないし、普通に剣として扱ったらまず間違いない。死人が出る。しかも上半身と下半身が泣き別れて感じの死人だ。

腕や足の一本くらい飛んでも事故扱いで罪にはならないとはいえ、わざわざ別の方法を考える必要も無い。そう思っていける所までこの方法で行くことにした。

そういう事で今回の試合でもそうするつもりだったんだが・・・

『さあ！この大会も6日目になって盛り上がってまいりました！今日の第二試合は『疾風連弾の射手』ことランクCの傭兵リーゲン・ハーレン対、無名の風来坊ながら、巨人族のごとき豪腕を有する黒鉄の男！マキアスだー！』

司会者が風の魔法で響き渡らせた声に心えて、観客席から空を割らんばかりの歓声が響く。

昨日、つまり5日目の時から司会者という名の実況がつくようになってた。人数が減って、試合を同じ時間に割り振る必要が無くなったからだろう。最初の日のように何十人かが限られたスペースで戦ってるのは違い、見やすい上に残っているのは勝ち残った猛者ばかりだから、昨日から観客が一気に増えた。

相手の男は弓矢使いだ。短弓を持っていることから遠くから隠れて狙い打ちするタイプではなく、ある程度距離を取りつつ正面から連射して獲物を仕留めるタイプのような。まあそうじゃないとこんな大会には出ないだろうけど。

「では、はじめっ！」

その合図が出されたとたん、弓使いはダッシュで俺から離れた。そして離れ切ったら、雨のように矢を降らせてくる。

『でたー！リーゲンの得意な戦法！全てを吹き飛ばす豪腕も当たらなければ意味は無い！このまま触れることもできずリーゲンの勝利となるかー！？』

まあ弓使いなら普通そう来るだろう。でも俺には当たらない。

いや、当たってはいるのだが効いてない。弓使いの矢は全て甲冑にはじかれていくからだ。

『おおっとー！リーゲンの矢は全てマキアスの甲冑にはじかれていくー！やはり全身鎧相手に矢は分が悪いかー！？』

弓使いは焦っているようだ。なぜなら矢が刺さる間接部を狙っているのに一本たりとも当たらないから。

俺からかなりの距離を取っているせいで、奴は自分が緊張して的外れているかと思っっているようだ。まあ実際に半分以上は外してるが。当たる瞬間少しだけ位置をずらして間接部に当たらないようにしている。大げさに動かないので避けているように見えないだけだ。

避けている様に見えないからさらに射かけてくる。俺は試合開始位置から一步も動いていないので足元には何本もの矢が転がり重なり合うようになった。

『雨のように矢を射掛けられてもマキアスは動揺一つしていないよーうだー！そうこうしている内にリーゲンの矢が残りわずかになって

いるっ！』

そこでようやく弓使いも矢切れの可能性に気がついたようだ。俺が動かないのをいいことに、弓を限界まで引き絞り、慎重に狙いをつけてくる。

おとなしくのようになってやる気はさらさら無いが。

『おっと？マキアス選手が足元の矢を拾って・・・？

投げたー！投げました！常識をくつがえす攻撃！しかも速いです！ただ投げてるだけなのに場外の壁に突き刺さっているー！いったい彼は何者なのかー！』

いやあ、割と好きなんだよな。ダーツ。投げナイフの練習がてらよくやったもんだ。

結局リーゲンとやらはあの後すぐ降参した。残りの矢より俺の足元にある矢のほうが多かったしね。俺が投げた矢は場外まで飛んでいくし、当たったらこれからの生活に支障をきたす。実に賢明な判断だ。

第六話 コーゼス闘技大会（中編）

弓使いとの試合が終わった後、特にやることも無いので次の試合をヒルダと一緒に見ることにした。俺は今有名人状態なので一番前のいい席を譲ってもらった。役得だ。

「さて、第三試合はランクBの傭兵『ロックマッシャー岩石砕き』グレットド・ボツキントン対、生まれながらの剣士にしてこの町出身の聖騎士殿、天才アレフ・ケインツハイルだー！」

闘技場で二人の男が審判を挟んで向かい合っている。一人は俺が最初に戦ったのと似たような、典型的なパワーファイターだ。もちろんなあんな木こりとは違ってがちりとした厚い鎧をまとい、筋肉のつき方も気迫も、戦いを生業にしているものだとも目で分かる。得物は殺さないことを考慮しているのか、大きな棍棒だ。

もう一人は隙間の無い高級そうな鎧を着た、剣を携えているのが実に様になる騎士だ。短い金髪と整った顔はまるで物語から抜け出て来たようにも思える。

この町出身だからか、それともその実力と容姿からか、観客席から彼を応援する黄色い声が高く響く。

……まあ後者だよなどう考えても。

試合ははつきり言って一方的な展開だった。傭兵の棍棒はことごとく空を切り、騎士の剣は確実に相手を追い詰める。

傭兵の動きが遅すぎて騎士についていけないのだ。騎士は鎧を着ていながらまるでそんなもの無いかのように動き、傭兵が疲労し

た隙をついて首に剣を突きつける。

「勝者アレフ・ケインツハイル！」

会場が歓声に沸く。特に試合開始の時黄色い声を上げていた女性の集団は狂喜乱舞していて、ちょっと引くほどだった。そこらへんの川にでも飛び込みそうだ。

「やってくれました！さすが最大手の優勝候補と言われるだけのことはあります！」

ですが優勝までには後二回！二回勝たなければなりません！そこにはあの無名の怪物・マキアスも含まれています！これからの活躍にも期待です！がんばれー！」

おい、なんでそこで俺の名前を出すんだ！そんな言い方したら俺が悪役みたいじゃねーか！悪魔だけど！

しかもなんかファンクラブ？の女性達がめっちゃこっち睨んでるし……試合前に毒でも盛られたらどうしてくれんだよ……

するとそのアレフとやらが俺に気がついたらしく、こっちを見た。そしてそのまま剣を抜く。

なんか嫌な予感がする。

「せつ、宣戦布告だー！アレフが観客席のマキアスに向けて剣を突きつけています！これは間違えようも無く宣戦布告！俺が倒してや

るという意思表示です！これにマキアスはどう応じるのかっ！」

こ、この野郎。

俺をストレスで弱らせる作戦か？

やってくれるじゃねえか・・・そんなに悪役をやって欲しいのなら乗ってやるよ。

他の観客全てに注視される中俺は観客席から立ち上がり、親指を突き出した握りこぶしを天に掲げて、眼下のアレフに向けてつき降るすしぐさをした。

いわゆる『地獄に落ちろ』のジェスチャー。今の俺の心境を最も正しく表現していると言えよう。

とたん湧き上がるブーイング。襲い掛かってくるような事は無かったが、はつきり言ってアレフが勝った時の歓声よりうるさい。例の女性陣なんか親の敵を前にした復讐者の形相で何事か叫んでいる。

そんなに叫ばれてもな。これで何もしなかったら俺がびびったみたいに見えるだろうが。

「ちょ、挑発です！アレフの宣戦布告にマキアスは悪質な挑発で返しました！まるで相手を愚弄するかのような行為！これは明後日の決勝が楽しみです！」

いや先に喧嘩売ってきたのはあの爽やかイケメンだろ。あの状況で何すりゃ悪役にならねーんだよ。

俺とヒルダはその後すぐ宿に帰ったが、帰る途中道ですれ違う人の半数以上に侮蔑の視線で睨まれた。何でもう町中に伝わってるんだよ……

精神攻撃を受けながらも無事宿に着いて夕食を頼むと、頼んだ料理が大盛りで出てきた。

何でか不思議に思っただけ料理を運んできた兄ちゃんに訳を聞くと、なんでもいけ好かない爽やかイケメン騎士をへこませて欲しいとの事。

彼は同じ時期に奴と剣を習ったことがあったようで、何度も訓練で打ちのめされた上に、彼が好きになった女の子はことごとく爽やかイケメンが好きだったらしい。

……まあ気持ちは分かる。

どうやら町中が敵ということは無さそうだ。なんだか情けない気もするが。

「ねえマキアス。私あのアレフって人知ってるかもしれないです」

部屋に戻って寝る準備をしていると、ヒルダが俺の部屋にやってきてそんなことを言った。

「ちょっと前に、いくつかの聖騎士団をまとめる団長さんが有望な若者が入ってきたって話してたんです。嬉しそうだったからよく覚えてます。たしかサークレア王国のすごい端っこの辺境の出だつて言ってたから、たぶんそうだと……」

「げ。挑発に乗ったのは不味かったかな。顔見られた？」
「いえ、スカーフで隠してたから見られて無いと思います。それにマキアス以外眼中に入っていない感じでしたから」

うーん。こんな所でのんきに闘技大会に出てるって事はまず間違
いなく俺が召喚された時に襲い掛かってきた連中の中にはいなかった
と思うが、聖騎士と深く関わるのはよくないな。

聞いた限りじゃ聖騎士になったばかりの新米みただし団内での
発言力は無さそうだけど、一応顔は見られないように気をつけよう。

次の日。準決勝の相手はかなり長い鉄槍を使う奴だったが、はっ
きり言って弓使いのほうが強かった。

どうやら俺の間合いの外から攻撃するために剣から槍に持ち替え
たらしいが、にわか仕込みの槍術の突きなどたかが知れてる。最初
の突きをかわして懐に入り、いつもの様に大剣で殴りつけて終わっ
た。試合時間は10秒にも満たない。

ブーイングがすごかったがそんなこと知るか。

爽やかイケメンも順調に勝つたらしく、お望みどおり俺と奴は決
勝で戦うことになった。

大会最終日。この日は町全体が異様な盛り上がりを見せていた。

大会を見に集まった客目当てに集まった商人は聖騎士関連の絵や
本を目玉商品として売り出し、吟遊詩人は悪の風来坊を叩きのめす
聖騎士の歌を歌う。まさしくお祭り騒ぎだ。この町のほとんどの住

人があの聖騎士が俺を倒すことを望んでいる。

俺にとってこの町は完全な敵地アウエーになったようだ。泣ける。奴をボコボコにしたらギルドに登録してすぐ町を出よう。宿屋の兄ちゃんを筆頭としてこっそり応援してくれる若者もいたけど。あと武具店のおっちゃんとか。

『ついに！ついにやってみりましたこの日が！コーゼス闘技大会最終日！決勝の時です！』

勝つのは豪腕の怪物・マキアスか！？それとも天才騎士・アレフ・ケインツハイルか！？

因縁の対決の火蓋が今切られるー！！』

因縁って・・・俺とこいつが会ったのは一昨日だぞ・・・

審判を挟んで俺とアレフが向き合う形になる。

後は開始の合図を待つだけだ。

「たしか、マキアスさんでしたよね」

いきなりアレフが俺に話しかけてきた。できれば声も覚えられたくないので無言で首肯する。

近くで見ると思った以上に若いことが分かる。ヒルダと大して変わらないんじゃないか？

「あなたの剣は乱暴に過ぎる。騎士以前に剣士として言いますが、剣は棍棒ではないんです。

それを僕が教えてあげます」

.....

・・・ハハハ。

言ってくれるぜヒヨッコ。

実力を隠した俺も悪いが、ちょーーーーっと調子に乗りすぎかな？

世の中は広いつて事を、俺が教えてやるよ。

第六話 コーゼス闘技大会（中編）（後書き）

もうすぐ春休みが終わって忙しくなるので、更新が週一程度になる
と思います。申し訳ありません。

第七話 コーゼス闘技大会（後編）（前書き）

遅くなつてすいません・・・

英語のセミナーを受けに行つてたらいつの間にか日が経つてました。
次は一週間以内に投稿出来るように頑張ります。

第七話 コーゼス闘技大会（後編）

「では、はじめっ」

審判の掛け声と同時にこちらに向かってくるアレフ。そのスピードはこの大会で戦った弓使いと同程度だ。弓使いが軽装であったことと、アレフが頭部以外を覆う鎧を着ていることを考慮すれば、これは驚異的なスピードと言えるだろう。

だが、その剣先は空を切った。

「なにっ！」

『おおっと！これまで相手が何かしてくる前にことごとく弾き飛ばし、勝利を収めてきたマキアス選手が始めて剣での攻撃を避けました！これはアレフ選手に攻撃する隙が無かったと言うことかー！？ そうだとしても素早さに定評のあるアレフ選手の斬撃を避けてみせるマキアス選手もやはり只者ではありません！』

会場が声援に沸く。今回だけは、すぐ終わらせずに付き合ってるよ。

すぐにまたアレフが攻撃を仕掛けてくる。素早く横に剣を薙ぎ、足払いをかけ、俺を切りつけようとする。

だが俺には当たらない。鎧にかすらせてすらいない。ほんのわずか、まさに紙一重で全ての攻撃をかわし続ける。

まるで二日前、アレフが棍棒を持った傭兵にしたように。

違うのは俺がまだ攻撃を仕掛けていないという事だけだ。

アレフがそんな馬鹿などでも言いたげに歪めた顔で、何度も俺に肉迫しようとする。

馬鹿め。

俺は悪魔だが、ほとんどの悪魔が備えているような特殊な能力や魔法の力を、一つの例外を除いて持っていない。

なぜ持っていないのか。それはそれらの能力を獲得するための時間を別のことに使ったからに他ならない。その時間のほとんどを、俺は戦いの技術を磨くために費やしたのだ。

俺の優しい上官は戦う力を持た無いにもかかわらず、26の軍団を率いて戦わなければならなかった。俺は彼女の最も傍に控える副官であり、騎獣であり、護衛だった。

生まれて幾千年俺はそれだけの為に生き、幾多の戦場を越え、死体の山を築いた。

俺にとって彼女を守ることが、敵を殺すことが、人生の全てだったのだ。

その俺が、お前みたいなヒヨッコの攻撃を避けられない訳無いだろう？

Side：アレフ

僕はとんでもない思い違いをしていた。

最初彼の戦いを見た時は、大柄とは言えない体から生み出されるその桁外れの膂力に驚いた。まるでどこかの物語の英雄のような力を持つ彼に、それほど腕力があるとは言えない僕は正直憧れの様なものを感じた。感動すらしたかも知れない。

でも何度か彼の試合を見るうちに、僕は彼を侮蔑の思いで見ることがなくなった。

彼はあれだけの力を持っているのに、それを振り回すことにしか使っていない様に見えた。相手がどんな人間であつてもやることは同じ。ただその圧倒的な力で叩き潰すだけ。

理不尽だと思った。この大会の参加者はみんなそれぞれ何らかの思いを持って参加している。それぞれが額に汗して精進し、技術を磨き、体を鍛える。その努力の結晶を、まるでなんの価値も無いかのように粉碎する彼は、人が長い年月をかけて築き上げた街をたった一日で粉碎する巨大な竜巻のようだった。

だから僕は彼を倒そうと思った。僕の技術が、今まで血を吐くような努力をして得たものが彼の圧倒的な力に勝ると信じていたからだ。ただ単純な力なんかには僕は負けないと証明したかった。

ある意味でそれは証明されたのかもしれない。

今僕の目の前でひたすら攻撃をかわし続ける彼は、単純な力なんかとは断じて違う。その足運びも、剣先を見切る目も、間違いない。僕の努力など塵芥ちりあくたに過ぎぬほどの膨大な鍛錬の末に彼が得たものなのだろう。

今の彼は竜巻などではなく、信じられぬほどの努力と経験を積んだ、万軍に勝るたった一人の軍勢レギオンだ。

僕は無意識のうちに口元がほころぶのを感じた。そう、僕は正しかったのだ。

たゆまぬ努力で得た技術は、圧倒的な力に勝る。

今の彼はまさにそれを体現していると言ってもよかった。

僕が憧れたもの　　目指すものはこれなのだ。

そして彼の實力の一端でも引き出せた事を、僕は神に感謝した。

Side：マキアス

さっきまで信じられないような物を見たかのような顔をして、精彩を欠いていたアレフの剣筋が急激に力を取り戻していくのを俺は

感じた。

アレフはさっきまでの動揺が嘘のように生き生きとした表情で俺に向かってくる。初めのどこか見下したような色は完全に消え、むしろ夢物語に登場する英雄に思いがけず出会い指南の機会を得たような、そんな興奮が見て取れた。

もっとも本領を發揮しようがしまいがヒヨコはヒヨコ、俺からすればその変化は特に警戒すべきことではない。

まあしかし、俺はこいつを少々見くびっていた。周りにちやほやされて天狗になってるだけの青二才かと思いきや、俺の技量を目にして向かってこれるとはなかなか芯が強いようだ。

この男は腕はまだだが剣士には違いない。ならば俺も剣士としてこの試合を終わらせてやるうと思つ。

司会者も観客も言葉を失って見守る中、俺はアレフの剣を払って奴が僅かに体勢を崩した隙をつき、首に剣を突き付けた。

試合は終わった。審判も司会者もまだ夢を見ているように呆けていたが、誰の目から見ても俺の勝ちだ。

俺が剣を収めると、同じく剣を収めたアレフが俺の前で膝を折つて言った。

「先ほどの無礼な発言を忘れて下さい。恥ずかしながら、水龍に泳ぎを教えると言ったようなものでした。貴方は素晴らしい剣士だ」

ああ、試合前のあれか。たしかに力チーンと来たけど、今考えればあんなてきとうすぎる試合をずっとしてきた俺にも非があるよな・
・
ていうかあんな挑発に乗るなんて俺すげえ大人げなかったな。相手はたがが生まれて20年もしないようなガキなのに。子供の挑発に乗って本気で叩き潰す大人とか・・もつと自制心が欲しいぜ。

なんか罪悪感を感じたので俺も膝をついてアレフにだけ聞こえるような声で囁いた。

「いや、俺もアンタのことを誤解していたようだからな、気にしないでくれ」

俺に宣戦布告することで精神的に追い詰める作戦なんじゃないかな。とかな。正直かなり腹黒くて高慢ちきで嫌味な野郎なんだろうと思ってた。だがどうやらあの精神攻撃は偶然の産物だったらしい。

今思えばまともにアレフと会話したのは今のが初めてなのだ。どんな人間か判っていたつもりの方が恥ずかしい。

その時観客席から笑顔のヒルダがかけよって来た。そのまま俺の首に飛びかかる。

「すごい！私マキアスのこと力だけが取り柄の悪魔トクなんだと思ってましたけど、実はすごかったんですね！見直しました！

動きの一つ一つが見たこと無いほど速くてきれいでしたよ！」

・・・え、なんかあんまり嬉しくないぞそれ。

やっぱりヒルダも俺のこと脳筋だと思ってたのか。まあ何も悪魔らしいところも見せてないから仕方ないんだけどさ・・・

『感動ですっ！！！！！！』

は？

『敵わぬことを悟った後も果敢に挑む若き聖騎士と、それに真摯な対応で答えた流浪の英雄・・・これほどの剣士がただ者であるはずがありません！彼はきつと騎士アレフの成長のために天がこの街に使わしたに違いないでしょう！我々は今日、奇跡を見ましたっ！！』

ちょ、おま、司会このやろう。なに訳のわからない事を言い出すんだ。

それと同時に固まったままだった観客が、「感動した！」だの、「あんたは素晴らしい人だ！」だの言いながら一斉に俺とアレフに向かって駆け寄ってきた。

なんなんだこれは。どうしろと言っんだ。

俺はヒルダを片手でかばいながら観客にもみくちゃにされた。四方八方から「故郷はどこ？」「どこで剣技を習ったの？」「どんな戦いを経験したのか？」と質問が飛んでくる。どうすればいいのかわからるので横目でアレフを見ると、なんか余裕の対応をしていた。

ムカつく。

「その娘は貴方の恋人なんですか？」「結婚はなされてる？」「その娘はとても熱心に貴方の試合を見ていましたよ。お熱いですね！」

おい。なんか変な方向に話が飛び火したぞ。

ヒルダが慌てて「け、結婚なんてしてません！」と顔真っ赤にして抗議しているが、観客達は熟知り顔で何やら勝手に納得している。

そのとき何やら質問に答えていたアレフがふいにこちらを振り向いて、輝かんばかりの笑顔で俺たちに大声で呼びかけた。

「マキアスさん。よろしければこの街で式を挙げられては？家は教会なんです。歓迎しますよ！」

アレフのこの一言が決定打だった。ヒルダの猛烈な抗議にもかかわらず、なんでかこの街で俺とヒルダは恋人同士という風に認識されてしまった。

それから俺達はこの街にいる間、宿屋でベッドを一つにされたり、薬屋で避妊薬をサービスされるなどの様々な余計な気遣いと共に、人々の生温かい視線を受けるはめになる。

アレフ・・・お前ほんとにワザとやってるんじゃないだろうな・・・

第七話 コーゼス闘技大会（後編）（後書き）

アレフは天然ですよ、（、、、）ノ

天然で相手を精神的に追い込むって腹黒よりタチ悪いですよね。
次アレフを連れていくかどうかでえらい悩みました・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3796k/>

マルコキアスの放浪記

2010年10月10日17時29分発行